

野菜生産出荷近代化計画の概要

(変更日 令和7年3月24日)

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋キャベツ	いわて	作付面積 630 ha 出荷量 20,094 t	<p>標高別の作型分化により計画的に長期出荷を図り、また、堆肥投入による土づくり、輪作体系や栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術やスマート農業技術を組み入れた機械化体系を導入し、軽労化・省力化による担い手の経営拡大と生産性の向上を図る。特に一戸町奥中山地区では、広大な畑地を活用した野菜や花き等の園芸振興を図るため、平成18年度から農協、市町村、県等関係機関が連携して取り組むことができる組織として「園芸産地確立サポートセンター」を設置し、園芸野菜等の安定生産に向けた活動を展開している。</p> <p>また、GAPの導入により経営改善に努める。さらに、加工業務用需要への対応、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>
夏秋きゅうり	岩手中央	作付面積 67 ha 出荷量 3,067 t	<p>露地栽培、施設栽培と播種期の組合せにより計画的な長期出荷を図り、また、堆肥投入による土づくりや栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術や機械を導入し、軽労化・省力化により担い手の経営拡大と生産性の向上を図る。また、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。さらに、流通面では出荷形態の改善、加工等契約取引、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>
夏秋きゅうり	花巻	作付面積 27 ha 出荷量 875 t	<p>当地域は、水田転作を契機に販売野菜の栽培に取り組んできた。水田農業における高収益作目の本作化に向けて、果菜類をはじめ、レタス、キャベツ等の葉茎菜の導入も積極的に行ってきた。</p> <p>管内きゅうりの栽培面積は現状約26haであり、近年、労働者不足や高齢化により、栽培面積並びに生産量は伸び悩みが課題となっている。</p> <p>市場の実需者や消費者から「安心・安全」に対する要望が高まっており、生産地としてその要望に対応し、有機質肥料を中心とした減化学肥料栽培に加え、減農薬栽培により高付加価値をめざし、併せて、中心等級を中心に大手量販店との契約取引を進める。</p> <p>今後、優良品種の積極的な導入や、有機質肥料の利用による環境に優しい栽培への取組、共同作業や機械化体系の導入によるコスト低減等、国際競争に負けない国内産地の確立に向け、体制の確立を図っていくものとする。</p>
夏秋きゅうり	一関三陸	作付面積 41 ha 出荷量 1,479 t	<p>1 生産性向上の方針 生産者の高齢化等により、作付面積は減少傾向にあるが、新規栽培者の確保、新技術（環境制御技術、高温対策技術等）の導入推進、産地の中核を担う経営体の経営拡大を促進し生産力の強化を図る。</p> <p>2 生産・流通改善方針 広域的な地域の特徴を生かし、JA間相互の圃場・集出荷施設における研修等により栽培技術向上を目指すとともに、出荷規格や資材を統一し共同配送を行うことで、流通の効率化を図り、生産・出荷体制をより一層強化する。販売流通面では、農薬使用履歴簿の確実な記帳の推進により、消費者の求める安全・安心な農産物の生産を徹底するとともに、内陸部と沿岸の気象条件の違いを活かした作型の分散化に組み込み、地域リレーによる長期安定出荷を目指す。</p>

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋きゅうり	二戸	作付面積 26 ha 出荷量 1,804 t	<p>当地域は広大な畑地を活用した野菜や花き、果樹等の園芸野菜の振興を図るため、農協、市町村、県等関係機関が連携して取り組むことができる組織として、平成18年度から園芸産地拡大アクションサポートセンターを各市町村に設置し、園芸野菜等の生産振興や経営体育成等の活動が展開され、生産性の向上や新規就農者増加等の成果が現れてきている。</p> <p>この中できゅうりは当地域の重点品目であり、特にりんごとの複合作物として生産拡大が図られ、経営の基幹品目として位置づけられていることから、省力化や栽培技術の高位平準化による安定生産、ハウスの有効利用による収穫期間の拡大を図りながら、消費者に安全・安心な農産物を提供していく体制を充実強化していく必要がある。</p>
夏秋きゅうり	胆江	作付面積 31 ha 出荷量 1,414 t	<p>1 生産性向上の方針 栽培管理や品種の統一化等による安全・安心な食材として供給出来る体制の整備、省力化技術及び機械の導入による軽労化・省力化、労力支援による生産拡大、単収向上による生産性の向上を図る。</p> <p>2 生産・流通改善方針 規格の簡素化を進め、販売アイテムを絞った販売を行う。また、信頼性の高い産地の形成を目指し、栽培履歴の記帳と情報開示、GAPに取り組むとともに、環境に配慮した高品質な野菜の生産に努める。</p>
秋冬さといも	きたかみ	作付面積 42 ha 出荷量 190 t	<p>「さといも」は、古くから地域で栽培されていたが、昭和50年頃から露地野菜の輪作品目として盛んに栽培されるようになった。北上川流域の肥沃な土壌条件のもと、藩政時代から維持されてきた「赤茎系」地域在来品種の栽培により、他の産地にはない独特のぬめり・粘りけを持ち、また、地域のさといも生産組合を中心に、生産者自らが優良な種芋を選抜、確保しつつ、品質・形状が高位安定した出荷を行っているため、高い市場評価を得ている。その先祖から受け継がれる長い栽培の歴史から、「二子さといも」は平成30年9月に地理的表示保護制度（GI制度）の登録を岩手県の青果物では初めて受けた。</p> <p>当地域においても、生産者の高齢化は進んでいるが、市場での評価も高く、安定した収入を見込める「さといも」は、当地域にとって重要な基幹作物であるため、今後とも安定した生産に取り組み、産地の維持を図る必要がある。今後は、JAいわて花巻及び関係機関・団体が一体となって生産者と交流を図りつつ、植え付け、収穫調製作業など栽培時期の検討を行うとともに、生産コスト及び労力を軽減するための取組を拡大し、共計販売の実施による安定出荷、種芋貯蔵や出荷調製、貯蔵技術の改善、土づくりの徹底など、市場における有利販売及び取引先の拡大につながる様々な対策を講じ、安定生産及び産地の維持を図っていくものである。</p>
夏だいこん	北岩手	作付面積 251 ha 出荷量 7,502 t	<p>標高別の作型分化により、計画的に長期安定出荷を図り、緑肥の導入や輪作体系、優良品種の選定等、栽培技術の向上により高品質で安全な野菜生産に努める。流通面では、加工業務用向け販路の確保や相対取引の強化、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組む、信頼性の高い産地を形成する。</p>

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋トマト	岩手中央	作付面積 72 ha 出荷量 2,931 t	雨よけ栽培を中心に計画出荷を行い、また、堆肥投入による土づくりや栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術や機械を導入し軽労化・省力化により担い手の経営拡大と生産性の向上を図る。また、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。さらに、流通面では出荷形態の改善、加工等契約取引、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。
夏秋トマト	花北	作付面積 18 ha 出荷量 525 t	当地域は、水田転作を契機に野菜の栽培に取り組んできた。果菜類を中心に作付けされてきたが、転作面積の増加に伴い、レタス、キャベツ等の土地利用型作目の導入も積極的に行ってきた。 トマトは、栽培面積のうち約7割がミニトマトである。ミニトマトは比較的軽作業で女性・高齢生産者でも栽培できるメリットを持っていることから栽培面積が拡大してきたが、近年は減少傾向にある。 市場等の実需者や消費者から「安心・安全」に対する要望が高まっており、生産地としてその要望に対応するため、有機質肥料を中心とした栽培に取り組むとともに、中心等級を中心に大手量販店との契約取引を進める。 今後、高温環境下でも品質の安定する品種の積極的な導入や、有機質肥料の利用による環境に優しい栽培への取組、共同作業や機械化体系の導入によるコスト低減等、国際競争に負けない国内産地の確立に向け、体制の確立を図っていくものとする。
夏秋トマト	一関	作付面積 38 ha 出荷量 1,752 t	1 生産性向上の方針 雨よけ栽培を中心とした安定生産と品質向上を推進するとともに、集出荷施設の有効利用により長期安定出荷を図る。 特に9～10月の出荷量拡大によるブランド力向上を目指すため、秋どりトマト（6月下旬～7月上旬の遅植え作型）の導入を推進し、産地全体で長期安定出荷を目指し、市場や消費者のニーズに応えられる産地とする。地域ブランド力が向上することで、単価向上にもつなげて、生産者の所得向上につなげる。 2 生産・流通改善方針 近年は、資材高騰の影響もあり栽培面積の拡大が難しいことから、自動点滴かん水によるこまめな追肥管理や自動換気装置の導入によるハウス内環境の改善に取り組み単収向上を目指す。また、近年の夏季高温による花落ち等の影響で秋の出荷量が少なくなっていることから、高温対策技術（遮熱資材の利用や外気導入、ミスト等）の実証や普及にも取り組み、単収向上を目指す。 販売流通面では、消費者の求める安全・安心な農産物の生産を徹底するとともに、出荷先ニーズに対応した出荷形態の検討、規格外品の有効利用を進めていく。
夏秋トマト	馬淵川	作付面積 19 ha 出荷量 1,165 t	当地域は広大な畑地を活用した野菜や花き、果樹等の園芸野菜の振興を図るため、農協、市町村、県等関係機関が連携して取り組むことができる組織として、平成18年度から園芸産地拡大アクションサポートセンターを各市町村に設置し、園芸野菜等の生産振興や経営体育成等の活動が展開され、生産性の向上や新規就農者増加等の成果が現れてきている。 この中でトマトとミニトマトは当地域の重点品目であり、経営の基幹品目として位置づけられていることから、雨よけ施設の導入やレインコート栽培の推進、環境制御技術の導入等により、省力化と生産性向上を図るとともに、消費者に安全・安心な農産物を提供していく体制を充実強化していく必要がある。

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋トマト	胆江	作付面積 23 ha 出荷量 849 t	<p>1 生産性向上の方針 栽培管理や品種の統一化等による安全・安心な食材として供給出来る体制の整備、省力化技術及び機械の導入による軽労化・省力化、労力支援による生産拡大、単収向上による生産性の向上を図る。</p> <p>2 生産・流通改善方針 規格の簡素化を進め、販売アイテムを絞った販売を行う。また、信頼性の高い産地の形成を目指し、栽培履歴の記帳と情報開示、GAPに取り組むとともに、環境に配慮した高品質な野菜の生産に努める。</p>
夏秋なす	一関	作付面積 39 ha 出荷量 1,179 t	<p>1 生産性向上の方針 トンネル栽培とハウス栽培の組み合わせによる生産体制の維持、新規栽培者の確保による面積拡大や地域リーダーを核とした生産者相互の指導による技術の高位平準化、集出荷施設の有効利用等により長期安定出荷を図る。また、近年の厳しい農業情勢においても所得を確保するために、栽培マニュアルを活用した栽培技術の高位平準化、自動かん水装置や、自動換気システムといった省力化技術の導入を図り、生産性の向上に取り組む。</p> <p>2 生産・流通改善方針 販売・流通面では、東北一のなす産地として出荷品質クレームゼロを実現し、輸送効率化のための11パレット対応コンテナ段ボールの出荷試験や、園芸センターの搬入動線改善に取り組み、計画的な安定供給の実現により市場や消費者から信頼される産地を目指す。</p>
夏ねぎ	花巻	作付面積 114 ha 出荷量 1,460 t	<p>当地域は、水田転作を契機に販売野菜の栽培に取り組んできた。水田農業における高収益作目の本作化に向けて、果菜類をはじめ、レタス、キャベツ等の葉茎菜の導入も積極的に行ってきた。</p> <p>このような中、平成2年、当地域の気象条件や栽培環境を検討し、「一本ねぎ」の栽培を開始した。気象条件がねぎ栽培に適し、また、品質も良好であったため、市場評価が高く、ねぎ栽培は年々拡大した。</p> <p>近年は高齢化等により栽培面積は減少傾向にあるが、ねぎは当地域の基幹作物として位置付けられており、産地の維持拡大を積極的に図っていくため、種々の施策を講じている。</p> <p>今後、優良品種の積極的な導入や、有機肥料体系による環境に優しい栽培、機械化体系による省力化等により産地の維持拡大を図っていくものとする。</p>
秋冬ねぎ	北岩手	作付面積 75 ha 出荷量 734 t	<p>計画的な播種により長期安定出荷を図り、堆肥投入による土づくりや栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術や機械を導入し軽労化・省力化により担い手の経営拡大と生産性の向上を図る。また、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。さらに流通面では、グループ出荷や相対取引、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
秋冬ねぎ	花巻	作付面積 60 ha 出荷量 651 t	<p>当地域は、水田転作を契機に野菜の栽培に取り組んできた。果菜類を中心に作付けされてきたが、転作面積の増加に伴い、レタス、キャベツ等の土地利用型作目の導入も積極的に行ってきた。</p> <p>管内きゅうりの栽培面積は現状約26haであり、近年、労働者不足や高齢化により、栽培面積並びに生産量は伸び悩みが課題となっている。</p> <p>市場の実需者や消費者から「安心・安全」に対する要望が高まっており、生産地としてその要望に対応し、有機質肥料を中心とした減化学肥料栽培に加え、減農薬栽培により高付加価値をめざし、併せて、中心等級を中心に大手量販店との契約取引を進める。</p> <p>今後、優良品種の積極的な導入や、有機質肥料の利用による環境に優しい栽培への取組、共同作業や機械化体系の導入によるコスト低減等、国際競争に負けない国内産地の確立に向け、体制の確立を図っていくものとする。</p>
夏秋ピーマン	北岩手	作付面積 63 ha 出荷量 1,703 t	<p>露地栽培、施設栽培の組合せにより計画的な長期出荷を図り、また、堆肥投入による土づくりや栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術や機械を導入し軽労化・省力化により担い手の経営拡大と生産性の向上を図る。</p> <p>また、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。さらに、流通面では、加工等契約取引、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>
夏秋ピーマン	花巻	作付面積 39 ha 出荷量 1,552 t	<p>当地域は、水田転作を契機に野菜の栽培に取り組んできた。転作面積の増加に伴い、所得率の高い果菜類を中心に作付けが推進されてきた。水稲とピーマンの作付けによる複合経営が多く、単収を高めるために露地栽培からハウス栽培への移行を積極的に進めてきたところである。</p> <p>市場の実需者や消費者から「安心・安全」に対する要望が高まっており、生産地としてその要望に対応し、有機質肥料を中心とした減化学肥料栽培に加え、減農薬栽培により高付加価値をめざし、併せて、中心等級を中心に大手量販店との契約取引を進める。</p> <p>今後、優良品種の積極的な導入や、有機質肥料の利用による環境に優しい栽培への取組、共同作業や機械化体系の導入によるコスト低減等、国際競争に負けない国内産地の確立に向け、体制の確立を図っていくものとする。</p>
夏秋ピーマン	いわい	作付面積 23 ha 出荷量 1,472 t	<p>1 生産性向上の方針 消費者の安全志向が年々高まる中、産地側にはこれまで以上に安全かつ、安心のできる生産物の供給が強く求められているため、生産販売においては、生産者個々の栽培記録記帳を継続するとともに、安定出荷のために、施設栽培への誘導推進を行っていく。</p> <p>2 生産・流通改善方針 出荷先は関東が中心で全出荷量の約8割を占めるが、各出荷先(各市場)からは、出荷量の拡大を要望されている。共同出荷体制が確立されれば全量が共販されており、その強みを生かし、流通形態・品質・出荷量等実需者ニーズに速やかに対応してきた。今後同様の対応ができるように努力していく。</p>

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋ピーマン	胆江	作付面積 49 ha 出荷量 1,964 t	<p>1 生産性向上の方針 栽培管理や品種の統一化等による安全・安心な食材として供給出来る体制の整備、省力化技術及び機械の導入による軽労化・省力化、労力支援による生産拡大、単収向上による生産性の向上を図る。</p> <p>2 生産・流通改善方針 規格の簡素化を進め、販売アイテムを絞った販売を行う。また、信頼性の高い産地の形成を目指し、栽培履歴の記帳と情報開示、GAPに取り組むとともに、環境に配慮した高品質な野菜の生産に努める。</p>
ほうれんそう	西根	作付面積 226 ha 出荷量 942 t	<p>計画的な播種や寒締め作型の拡大により長期出荷を図り、連作障害に対応できる技術を検討するとともに、雨よけ及び高温期の遮光、堆肥投入による土づくり、輪作体系や栽培技術の向上により安定収量を確保する。また、調整センターの活用や、省力技術・機械を導入した軽労化・省力化により担い手の経営拡大を進め、生産性の向上を図る。さらに、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。流通面では、鮮度保持対策など出荷形態の改善、加工等契約取引、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>
ほうれんそう	久慈	作付面積 189 ha 出荷量 980 t	<p>1 生産性向上の方針 ・規模拡大に意欲的な農家に対し、各種事業を活用した省力化機械の導入や遊休ハウスの移設などを通じて規模拡大を推進する。 ・高温対策や品種比較試験、土壌診断、土壌消毒等の技術普及により単収の向上を目指す。 ・若手生産者に対する生産拡大支援や研修・部会活動への参加誘導等を行い、経営発展を支援する。</p> <p>2 生産・流通改善方針 ・契約的販売（予約相対取引等）により、安定出荷と信頼確保に努める。 ・春から秋にかけてレギュラーほうれんそうと冬場に寒締めほうれんそうを出荷することにより、月変動の少ない年間を通した安定出荷に努める。</p>
春レタス	花巻	作付面積 23 ha 出荷量 385 t	<p>当地域は、水田農業における高収益作目の本作化を推進しており、農協合併を契機として組織力が強化され、集出荷施設も整備されたことにより流通機能が充実し、野菜産地としての地位が着実に進展している。 春レタスは高収益作物の本作化を契機に夏秋きゅうり等果菜類の前作として、春一番の換金作物として、地域の重点推進品目として推進されている。 今後、優良品種の積極的な導入、計画的な播種と栽培技術の統一、堆肥投入による土づくり、輪作体系や栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、担い手への経営拡大を進める。 また、環境に配慮した農業技術の導入により高品質な野菜生産に努める。さらに、流通面では通いコンテナの使用や鮮度保持対策など出荷形態の改善、加工等契約取引、栽培履歴の記帳と情報開示に取り組み、信頼性の高い産地を形成していく。</p>
夏秋レタス	北岩手	作付面積 79 ha 出荷量 1,501 t	<p>標高別の作型分化により計画的に長期出荷を図り、また、堆肥投入による土づくり、輪作体系や栽培技術の向上により安定収量を確保するとともに、省力技術や機械を導入し、軽労化・省力化により担い手の経営拡大を進める。また、いわて国際水準GAPの実施に向けてチェックシート等により、取組改善に努める。さらに、流通面では、グループ出荷体制を構築し、高品質での出荷継続や、栽培履歴簿の記帳・回収・検証に取り組み、信頼性の高い産地を形成する。</p>

種別	指定産地名	目標（令和9年）	生産及び出荷の近代化に関する基本的構想
夏秋レタス	奥中山	作付面積 220 ha 出荷量 5,200 t	<p>当地域は広大な畑地を活用した野菜や花き、果樹等の園芸野菜の振興を図るため、農協、市町村、県等関係機関が連携して取り組むことができる組織として、平成18年度から園芸産地拡大アクションサポートセンターを各市町村に設置し、園芸野菜等の生産振興や経営体育成等の活動が展開され、生産性の向上や新規就農者増加等の成果が現れてきている。</p> <p>この中でレタスは、当地域の重点品目であり、平成15年度にはいわて奥中山農業協同組合（現在は新岩手農業協同組合）に生産振興総合対策事業で予冷施設が導入されるなど、経営の基幹品目として位置づけられている。新たな取組として、生産量の安定と販売額確保のため非結球レタスと結球レタスを組み合わせた作型の導入、レタス産地として関東等大消費地の安全安心な農畜産物を求める動きに応えるため組織的な国際標準GAP認証取得の取組などを進めており、産地の取組が定着・発展するよう、サポートセンター組織が中心となり支援する。</p>